

# 「病から学んだこと」

鹿児島県立鹿児島工業高等学校二年

馬場

楓

私は、あたり前のことがあたり前にできる喜び。自分の好きな音楽を聴き、親しい友人と共に語り合うなどの「普通」のことは、実はとても特別なことなのだ、私はある病気によって知りました。

それは、突発性難聴という突発的に起こる原因不明の難聴でした。昨年六月、朝起きると右耳が聴こえない状態で、キーンと高い耳鳴りが聴こえていました。すぐさま耳鼻科で診断を受けました。鼓膜は異常なしでしたが、聴力検査をすると左耳と比べて大きく差があることがわかったので、

「突発性難聴と思われるので一週間ほど入院してください。」

と医師は私に告げました。入院するとは思っておらず、ただただ驚くばかりでした。

私は吹奏楽部に所属しています。耳を使うこの部活動は私にとっての生きがいであり、大好きな居場所です。しかし、完治しなかった場合には続けることは困難になるとのことでした。完治する割合は約十人に三人と、あまり良い数字ではありませんでした。

入院生活が始まりました。治療は一日四種類の薬と一日二回の点滴でした。友人や部の仲間達がお見舞いに来てくれた時には、声があまり聴こえない悲しさに泣いてしまうことも多くありました。しかし、その度

に笑わせてくれたり慰めてくれたり、病に対する勇気をたくさん貰いました。絶対に十人に三人の人間になってやると思い、必死に毎日を過ごしました。完治して、再び皆と共に楽器を演奏できることを願いながら日々を過ごしました。復帰できることを信じてくれた部の仲間へ、お見舞いに来る度に楽譜を覚えてくれました。

一週間後、私は無事に退院することができました。とても長く感じた一週間でした。退院後も通院が必要で、部活動を休む日も授業を途中から受ける日もありました。退院して二か月が経った日、やっと医師から完治という言葉がいただきました。とても嬉しくて涙が涙が止まらなかったのを覚えています。

突発性難聴は、原因不明ではありますが、ストレスや不安の少なさが完治につながると言われました。私は周りの人々に支えられて今も大好きな吹奏楽を続けられているのだと気がつきました。病は気からというように心に余裕をもつと病気は良くなっていくということもあるそうです。また、日々あたり前にできていることは誰かが支えてくれているからであり、とても貴重なことだと知りました。これからは、日々の生活を大切に過ごし、健康に気をつけて生活していきます。